



硯箱

8 川之邊一朝 明治二十九年帝室技芸員任命  
《石山寺蒔絵文台硯箱》 一具

明治三十二年(一八九九) 木製漆塗、蒔絵  
文台 三六・八×六四・九×一・八  
硯箱 二五・七×二二・七×四・八

本作は、紫式部が石山寺に参籠した折りに『源氏物語』の着想を得たという伝承に取材してその図様を蒔絵で表した文台と硯箱の二具である。硯箱の蓋表には、石山寺の堂宇に座す紫式部を描き、内部は蓋裏と見込みの画面が繋がるように、紅葉の散る流水と籬に囲まれた秋草の図が配されている。道具類はいずれも紅葉散の意匠で、赤銅地の水滴には金の高肉象嵌によって、紅葉が散らされている。一方の文台は、石山寺の名所である蛭谷の図で、湖面に映る月を繊細な研出蒔絵で表している。

作者の川之邊一朝(一八三〇〜一九一〇)は江戸浅草に生まれ十二歳のときから幕府お抱えの蒔絵師幸阿弥因幡の蒔絵仕手頭武井藤助について修行し、嘉永三年に独立してその名を平右衛門と改め、一朝と号した。明治六年のウィーン万国博覧会以降、内外の博覧会へ出品を重ねた。明治二十年には皇居造営時に内部装飾にも加わり、明治の三大作といわれた御下命制作のうち、二件の制作に関わっている。まずは加納夏雄が彫刻主任となり明治二十六年に起工して制作が進められた「菊御作太刀」拵(御物)のうち鞘の蒔絵を手がけ、さらには同二十七年に起工した「菊蒔絵螺鈿棚」(当館蔵)は三十六年の完成までの永きにわたり、その門下の蒔絵師たちを率いて制作に当たった。このように、一朝は明治二十年代から三十年代にかけて進められた宮内省の直轄による工芸品制作事業に大きく関わった蒔絵師であった。また、二十七年より東京美術学校の嘱託、三十年には教授となり三十八年まで後進の指導に努めた。『巴里万国大博覧会出品録』に綴られた本作の説明書には、自筆により、使用した材料、技法、手順について詳細に記されており、一朝の漆工技法を知る貴重な資料となっている。一朝は幸阿弥派の伝統的な蒔絵技法の正統を伝える最後の継承者と当時からとらえられており、技法の記載にこだわった点にもその自負がうかがえる。なお、本作の意匠考案は明治三十九年に凶案の分野で唯一帝室技芸員に任命された岸光景(一八四〇〜一九三二)による。岸により同博に出品された「大堰川蒔絵棚」もまた、一朝が蒔絵に関わった作品である。



文台表面



文台姿



文台裏面時絵銘



硯箱内部

明治32年7月29日付川之邊一朝による作品の解説書  
（『巴里万国大博覧会出品録』宮内庁書陵部蔵）

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

皇室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 47

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成二十年七月十九日発行

© 2008 The Museum of the Imperial Collections